The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	しこうして、ことば学
Author(s)	沖田, 知子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2017, 2016, p. 11-20
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/62061
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

しこうして、ことば学*

沖田知子

１．はじめに

ことば学への流れは、言語哲学における言語的転回から始まり、さらに語用論的転回を経て、実際に使われることばとそれに含まれる心の様相を総合的に捉えようとするアプローチになったといえよう。いわゆる分析的な linguistics に対して、めざすものから言えば Approach to language and mind であり 、より具体的には Pragmatic stylistics、さらに Metapragmatics となる。Culpeper and Haugh (2014: 240) も以下のように相互意識による言語使用の研究としている。

(1) Metapragmatics, in our view, encompasses the study of language usages that indicate reflexive awareness on the part of participants about those interactive or communicative activities they are currently engaged in.

２．試行して

まず、ことば学への試行を概観してみたい。

2.1　文体論

文体論研究は元来主として文学の分野で行われてきたが、Roman Jacobson を中心に言語学的な観点が導入されるとともに、文体は形式・意味のどちらに求めるべきかという、科学的な言語研究における基本的な論争が始まった。Weber (1996: 3) は、言語学的文体論の発展を踏まえたうえで、新たな方向性を示唆している。

(2) It became increasingly clear that style is not either inherent in the text (as the formalists claimed) or totally in the reader's mind (as Fish and other reader-response theorist claimed) but an effect produced in, by and through the interaction between text and reader. Thus meaning and stylistic effect are not fixed and stable, and cannot be drug out of the text as in an archaeological approach, but they have to be seen as a potential which is actualized in a (real) reader's mind, the product of a dialogic interaction between author, the author's context of production, the text, the reader and the reader's context of reception—where context includes all sorts of sociohistorical, cultural and intertextual factors.

---

*本稿は、2017 年 3 月 9 日に行った最終講義に加筆修正したものであるが、紙面の都合で用例分析は割愛した。長きにわたってご厚誼をくださった皆様に、この場をお借りして心からのお礼を申し上げたい。なお、本研究は科研費 JSPS 科研費（JP15K02598）の助成を受けたものである。

文体（style）は、テクストの中に固有のものでもなければ、読み手の心の中にあるものでもなく、テクストとその読み手との相互関係において、それにより、それを通して生み出される効果であると指摘している。意味や文体効果は固定的なものではなく、読み手の心に喚起される可能性として捉えられるとし、テクストからコンテクストへの拡大を主張する。全ての社会歴史的、文化的、間テクスト的要素を包含するものとしてコンテクストを導入することにより従来の、意味か形式かという対立構造を超える止揚した領域として、コンテクスト重視の文体論（contextulalized stylistics）の可能性を指摘している。

コンテクストとなると、語用論の出番となる。

2.2　語用論

20 世紀半ばになって、分析哲学の流れをひく言語哲学から日常言語学派が生まれ、semantic = logical と一線を画した、日常的に使われることばのありさまを対象とするようになった。そうなると当然コンテクストを始めとするさまざまな変動要因が影響するため、厳密さを欠くものとしてゴミ箱に入れられるという動きすらあったが、それを取り出し研究したのが、語用論ということになる。真空中のことばでなく、空気中で実際に使われることばを研究対象とする。空気中で使われるからこそ、空気を読むということも求められるのである。

言語使用を扱う語用論では、たちまちそれを使用する人間、場、時を始めとするコンテクストが関係してきて、生きたことばから伝えられる心を総合的に扱う必要が出てくる。その基盤には、使い手のことばと心を繋ぐための受け手による推論が関係する。そこで、言表と含意の別の指摘（Grice 1975）から、さらに推論に焦点があてられるようになった。Sperber and Wilson（1995[2]: 27）は、以下のように指摘している。

(3) Verbal communication is a complex form of communication. Linguistic coding and decoding is involved, but the linguistic meaning of an uttered sentence falls short of encoding what the speaker means: it merely helps the audience infer what she means.

ことばによるコミュニケーションでは、言語的記号化と解読は含まれるものの、発話の言語的意味には話者の意図するところが十分含まれることはなく、まともに読み取るためには聞き手はそれを元に推論するしかないと指摘する。これは「言語意味確定度不十分性のテーゼ」（The Underdeterminacy Thesis, Carston 2002）として、この不十分なことばからどのように心をくみ取っていくのかが求められ、推論を使った語用論的解釈過程すなわち「心の理論」（theory of mind）が射程に入ってくる。

同様にコンテクストの扱いにも問題がある。たとえば、さしあたって必要な情報だけを取り出す経済性や、相手の背景や知識に関する相互知識をめぐる循環論などを考えると、コンテクストもまた多種多様であり十分に確定しにくく結果的に解釈の不確定性さえ孕む。

このように語用論が扱う分野では、ことばやコンテクストが表すものは確定するには不

十分であることを認識したうえで、どれだけ関連性のあるものへと推論で絞りこんでいけるかということが重要となる。このような言語使用における緩さを認めたうえで、確定するには不十分なものからなんとか引き出そうとする試みであり、推論が必須となる。

2.3 推論と解釈

Carston (1998: 214) は、関連性による解釈の発見法 (Relevance-guided comprehension heuristic) では、話し手の能力（不足）や（矛盾しうる）選好 (speaker's (flawed) abilities and (possibly conflicting) preferences) により、ときに聴者はより多めに労力 (more-than-minimal effort) をかけ、次のような手順で解釈を行うとする。

(4) (i) consider possible interpretations in their order of accessibility (i.e., following a path of least effort); and
(ii) stop when the expected level of relevance is achieved (or appears unachievable).

解釈プロセスでは、最小の労力からアクセスできる順に可能な解釈を求め、関連性の期待されるレベルが達成されれば（あるいは達成できない見込みがつけば）、それ以上の追及はしないことになる。聞き手は関連性を期待しつつ、その期待値は結果的に十分でなくても話し手の手段やゴールに合致できればよいという緩いものである。したがって、受け手によっては差が生じてしまうことになる。

さらに心理学の観点から市川 (1997: 110-111) は、時間がかかったとしても必ず正解が得られる計算手続きのアルゴリズムに対し、「常に正解に至るわけではないが、多くの場合、楽に速く正解を見つけられる『うまいやり方』をさし、『発見法』などと訳される」ヒューリスティックス (heuristics) をとりあげている。これは、ときには「『手を抜いたやり方』というニュアンスで『簡便法』と訳されたり」して、とんでもない答えを導き出したりすると指摘する。

このような発見法に直観的な推論が係わっているということは、労せずして直観的に推論をしたり、それがうまくいかなければいろいろ考え計算したりすることからも考えられる。Culpeper & Haugh (2014: 137) が以下で指摘するように、直接的と間接的という 2 種の反応を示しうることになる。関連性のみならず経済性も関与している点は、人間の性向を考えると示唆的である。

(5) An inference is intuitive when a user accepts conclusions without attending to reasons, and so it is a representational process. An inference is reflective when a user derives conclusions from premises through reasoning. The latter thus requires reflection, that is, thinking about one's thoughts, which is a metarepresentational process, albeit not necessarily a consciously experienced one . . . This distinction is useful as it sidesteps the problem of calling the kinds of inferential work we normally assume to underlie pragmatic meaning as "pseudo-logical" or even "pragmatic". One question that remains somewhat open,

however, is whether associative inference falls under the broader category of intuitive inference.

直接的な直観はことばの表象プロセス、間接的な思惟を介すメタ表象プロセスということになり、この種の推論が pseudo-logical ひいては pragmatic であると指摘している。これに基づき、さまざまなコンテクストによる解釈の可能性を想定した、柔軟な解釈が可能となる。そしてこれは、Grice (1967: 45)の会話の公理のうち、量の第一下位公理 (Make your contribution as informative as is required (for the current purposes of the exchange).) に付記された「さしあたってのために」という担保条件にも係り、多様な推論の可能性を拓くことになる。つまり、ことばの確定度不十分性やその結果としての解釈の不確定性をいかに絞っていくのかということになる。このような直観と思惟の 2 段構えの推論では、第一段階で済むならそれで済ますことも多く、結果得られる推意の程度差も生じうることになる。

したがって、強い推意と弱い推意という区別 (Sperber and Wilson 1995[2]) もまた解は一つではないことを示している。内田 (2011: 226) は推意の強弱をテクスト解釈に応用し、このような仕掛けを「ひねり」と名付けて分析している。

(6) 強い推意であればあるほどその推意の復元の確定性が増し、逆に推意が弱ければ弱いほど聞き手の解釈の幅が増大し、それだけ聞き手の責任にゆだねられる度合いが大きくなるのである。

聞き手あるいは読者の注意をある一定方向に向けさせておいて次の発話や話の展開を予想させ、結果的にその予想に反する発話をしたり筋を展開させることによって劇的効果を狙うことがある。

2.4 ことば学

語用論と文体論は別個に発達してきた分野ではあるが、実際に使われたことばを対象とする点ではインターフェイスにある。勿論、語用論でも文学作品を扱わない領域もあり、逆に文体論でも語用論的概念に頼らない領域もある。Chapman and Clark (2014: 6) は語用論的文学文体論では、文学文体論がめざす新しい読みや評価の提示というよりは、どうしてそのような読みや評価が喚起されるのかを説明することに狙いがあると指摘する。

(7) One is that the aim of pragmatic literary stylistics, like that of stylistics in general, is not to offer new readings or to suggest interpretations or evaluations that have not been identified by literary critics and other readers. Rather, the aim is to understand and explain how such readings, interpretations and evaluations arise, develop, and spread.

つまり、語用論と文体論を組み合わせたアプローチは、どのようにことばが使われどのような効果を生み出すのかまでのプロセスを射程にいれることにより、解釈の説明と実証が可能になるとする。文学作品を対象とした具体的な新しいテーマとして、初読と再読時での推論の違いと、推論プロセスが鑑賞にどれだけ貢献するのかをあげている (p.11)。これは 2 種

の推論の特性を考えれば、初読時と再読時の読みが違ってくる場合のみならず、上述の内田の言うひねりのように故意に仕掛ける場合も想定される。

ことば学はメタ語用論として、総合的かつ立体的にことばと心の関係を読み解く試みである。ことばには、話し手が意図的に語、視点や構図を選択してその心を織り込んだり盛り込んだりする一方で、聞き手はこのような発信に潜む仕掛けも意識し、コンテクストや自らの立場なども勘案しつつ心を撚り出し反応しようとする。話し手が「見せる」ことばを手がかかりに、聞き手は推論してそこに含まれる心を「見なす」。つまり、ことばの表象及びそのメタ表象としての心のやりとりを相互反映させながら扱う謎解きのプロセスといえよう。その意味で文学作品を題材にした場合には、そのやり取りを俯瞰しデザインする作者がいることでより大きな枠、高次レベルのメタ表象をも対象とすることになる。

分析的な言語学は使い手の理論であるのに対し、総合的なことば学は受け手をも含めたものであり、それを繋ぐのが語用論といえよう。つまり、使い手の見せることばからそこに込められた心を見なすのが、受け手に求められる役割であり、ことばと心の理論（theory of language and mind）たるゆえんである。ことばをきっかけとした心の動きを射程に入れるという点で、この語用論的文体論を cognitive humanities の一分野に入れるのも自然な流れであると考えられる。cognitive pragmatics を標榜する関連性理論は、伝達と認知の両面から、不十分なことばで心を伝え、またその心を引き出そうとする過程を捉えようとしている。

相互行為のやりとりでは相互反映性が要となるが、立場を交替しながら反映させていくのであるから、いずれもが深くかかわることとなる。そこで、最初の Culpeper and Haugh の（1）に戻ることになる。

３．私考して

まず、筆者が考えることば学の基礎となる点をいくつか押さえておきたい。いわば、ことばの種を芽吹かせ花開かせるプロセスと、さらにそれを愛でるプロセスである。言い換えれば、見せることばと見なす心の両軸である。

3.1　見せることば

3.1.1　志向して

Searle(1983: 5)は、志向性（Intentionality）こそが言語を生み出す原動力であるとし、さらに次のように述べる。

（8）Since linguistic meaning is a form of derived Intentionality, its possibilities and limitations are set by the possibilities and limitations of Intentionality. The main function which language derives from Intentionality is, obviously, its capacity to represent. (p.175)

言語的意味は志向性から導き出され、その可能性や限界は志向性によって決まり、その主た

る機能は表象能力にあるとする。つまり、あらゆる言語は志向性をもち、そして言語のもつ表象能力は心の志向性に由来し、この志向性はそもそも心的状態そのものに内在し、話者の意味を構成するのである。志向性は心的表象（mental representation）であり、ある意味ことばの種といえよう。

3.1.2　思考して

Sperber（2000:3）では、ことばに係るメタ表象として 4 種の心と発話の表象（mental representation, public representation）の組み合わせ―心的表象の心的表象、発話表象の心的表象、心的表象の発話表象、発話表象の発話表象―を想定している。内田（2013）は、語用論的能力の一つであるメタ表象能力を「他者が思っていることを推しはかる能力(p.62)」とし、さらに「広義の意味での『引用』現象がメタ表象として再解釈されている（p.64)」と指摘している。「誰の」という視点を入れると、誰の心的表象を誰の発話表象として、つまり誰の考えを誰の声で言うのか、という引用とその階層性を扱うことになる。続けて、以下のような興味深い指摘をしている。つまり自分を含めた「他者のことばのメタ表象としての心」(other minds）を推しはかるメタ表象能力が求められる。

(9)　ことばがかかわるメタ表象とはだれかが発話したこと、あるいは心のなかで思っていることをことばで言い表すことであった。このことを突き詰めて考えると、自分自身の言ったこと、思っていることをことばで伝えることもメタ表象ということになろう。(内田 2013: 143)

Wilson (2000: 414）は、Grice の推論モデルを「話し手は伝えたい思考をメタ表象し、聞き手は話し手の意図をメタ表象する」と再解釈し、mindreading と相通じるものがあると再評価している。つまり、推論の働きで「他者のことばのメタ表象としての心」を互いにいかにひき出すのかということは、メタ語用論としてことばと心の問題を総合的に扱うことでもある（Culpeper and Haugh 2014: 240)。

3.1.3　嗜好して

このようにコミュニケーションでは、相互のことば遣いに対するメタ語用論的意識が欠かせないことは明らかであり、話し手のことばの選択やコンテクストなども含め、なぜこのような言い方で何を伝えようとしているのかなどをメタ語用論的に意識して、その心を読み取ることが求められる。発話をなす言語的意味の補充のみならず、命題の一部の取り立て、話し手の評価や態度、働きかけの主張や証拠といった、情報の修整（elaboration）はたえず行われており、対人関係や情報管理をも意識した総合的な観点から、立体的に捉える必要がある。また話し手自身の発話のみならず、聞き手としても相手の発話との意識的な調整や談話の切り盛りも行い、それが相互に反映されていくのである。

豊田（2017 : 12）は「スタイル読み」という観察の必要性を説いている。『ローマの休日』のアン王女の台詞 “I’m indisposed. I’m better.” を例に、本来語の ill, sick, unwell のもつ

具体性に対し、抽象性をもつ外来語 indisposed を選んだことに着目し、以下のように述べている。

(10) 読み手ないし聞き手は、indisposed の意味を理解すると、すぐ次の語に移るのが普通ですが、そこで瞬時、立ち止まって、その語が浮上するプロセスを考えてみる。つまり、コンテスクトを勘案して、他の可能性が排除されたプロセスに注意を向ける、というわけです。

このように語の選択には使い手の嗜好が反映されており、それを読み取る必要がある。これは語のみならず、構図や表現のとり方にもみられるので、メタ語用論的意識の流れを立体的に読み解く必要がある。

3.2　見なす心

このような使い手の重層化することばに呼応した読み手の反応が求められる。読みを立体化させるプロセスとして、ここで 3 つの点を押さえ直しておきたい。

発話には伝える命題に対して話し手の命題態度（it-is-so）や発話態度（I-say-so）が付加されるという階層性がある（Lyons 1977)。語用論的にいえば、命題に対して話し手の判断であるモダリティを付けたものが主張されることになる（毛利 1980)。ここで注意しておきたいのは、毛利は命題態度としてモダリティを想定することで、典型的な it is the case that のような明快な場合のみならず、その確信度についても程度の差を想定していることである。そうなると、必然的に発話態度についても確信度の程度が生じることになり、結局、使い手は自ら伝えたい命題に対する修整を行ったうえで提示しているということになる。基本的には命題を発話する行為自体が主張となるが、さらに使われる発話動詞の種類により発語内の力が詳述されたり、モダリティの程度が加減されたりする。また命題内部においても話し手の意識が反映されたことば遣いが含まれたりする。線条的に使われることばの表象にはこれらのレベルが混在しているので、立体的に捉える必要がある。つまり、使われたことばの表象、さらにはそのメタ表象を扱うのである。

次に、前述した言語的意味の確定度不十分性である。発話の言語的意味に話し手の意図するところは十分含まれないので、まともに読み取るために聞き手はそれを元に推論するしかないことになる。推論を使う語用論的解釈プロセスを扱う心の理論においては、使われたことばの表象とメタ表象から、使い手の心であるメタ表象を引き出すことが求められる。

さらにコミュニケーションは相互行為である。基本的には最小の労力で最大の効果をあげられるよう、話し手はできるだけ聞き手に伝わりやすいよう工夫し、また聞き手は話し手の意図をできるだけくみ取ろうとする。使われるコンテクストと連動したやりとりにおける協働関係であると考えられる。さらには、立場が相互に入れ替わっていくプロセスの重層化がみられる。

このように、相互のことば遣いに対するメタ語用論的意識が欠かせないことは明らかであり、話し手のことばの選択やコンテクストなども含め、なぜこのような言い方で何を伝え

ようとしているのかなどをメタ語用論的に意識して、その心を読み取ろうとすることが受け手には求められる。発話をなす言語的意味の補充のみならず、命題の一部の取り立て、話し手の評価や態度、働きかけの主張や証拠といった、情報の修整はたえず行われており、対人関係や情報管理をも意識した総合的な観点から、立体的に捉える必要がある。

ことば学は、不十分でありながらもことばが伝える多様な心とその効果を解明しようとするものであり、いわば生きたことばの面白さまで射程に入れている。送り手が「見せる」ことばを手がかかりに、そのことばに含まれた心を受け手が自分のことばにして「見なす」のである。さらに、ことば学ではその解釈プロセスの可能性および効果をみるという点で、さらなるメタ表象としてのことばの可変性や面白さを扱う。つまり「立体読み」(毛利 1992) による謎解きのプロセスなのである。

Weber (1996) や Chapman and Clark (2014) の問題設定も参考にしつつ、その仕組と働き、さらには効果という 3 つの視点から考察を行う必要がある。初読の読みと再読の読みの違いというのは、ある意味 2 種の推論の結果を示している。そのような違いがどのように導かれるかを考えるのは興味深い。

(11) ①仕組：どのように見せることばから推論で心を見なしていくのか
②働き：最初の読みをどのように修正していくのか
③効果：推論プロセスが評価にどれだけ貢献するのか

送り手が意図的に語、視点や構図を選択してそこに心を織り込んだりする一方で、受け手はこのような発信に潜む仕掛けも意識し、コンテクストなどを利用しながら送り手の心に迫り、それに対する自らの態度なども勘案しつつ心を見なそうとするのである。

メタ語用論では、参与者の相互に反映しあう意識を示す言語使用を扱う。ことばの表象及びそのメタ表象としての心のやりとりを総合的に扱うのである。推論の働きで「他者のことばのメタ表象としての心」を互いにいかにひき出すのかということは、メタ語用論としてことばと心の問題を総合的に扱うことでもある。分析の縁として、Culpeper and Haugh (2014: 241) は、4 種のメタ語用論的意識の指標 (explicit indicators of metapragmatic awareness) をあげている。

(12) 語用論的標識 (pragmatic markers: surrounding talk, epistemic status of what is meant, evidential status of what is meant, specificity or precision of what is said)
伝達法 (reported language use: quotative use of language, echoic instances of language use)
メタ語用論的表明 (metapragmatic commentary: linguistic action verbs, attitudinal categorisers, emotive-cognitive state-process など)
社会言説 (social discourse)

(13) MYERS.　I put it to you, you were pretty desperate for money?
LEONARD.　Not desperate.　I—well, I felt a bit worried.
(Christie, *Witness for the Prosecution*)

メタ語用論的意識が明示的に表れるのは、情報の使い方、伝え方、織り込みや盛り込み、さらに解釈の枠組みを表すものといえよう。たとえば、コンテクストを踏まえた見解や評価のメタ語用論的表明には、ことばを選択して遣う際の話し手の心が反映される。(13) のレナードの発話では、相手の発話態度の表明に続く命題部のメタ語用論的表明の desperate をエコーして否定し、well でことばを濁しながらも worried と言い換える。語用論的標識 pretty をより軽度の a bit に変え、相手が pretty desperate と決めつけた評価を felt a bit worried と弱く言い換える。つまり、語用論的標識とメタ語用論的表明の相乗効果を利用して、問題の矮小化による言い逃れの発話に仕立て上げているといえよう。

(12) の指標が重層的に使われている例や、一見簡単そうに見えるやりとりに潜むからくり、さらにはそれらをデザインする作者の手法など、実際に読みを施行していく場合には、このような立体読みが必要となる。送り手や、文学作品の場合は作者の情報をデザインする意図や心を引き出すことが求められる。

メタ言語的意識は、ことばに使い手の意識が表れるという発信面と、それを意識してみることで使い手の心を見なす受信面の双方に係る。送り手の「見せる」ことばを手がかかりに、そのことばに含まれた心を受け手が自分のことばにして「見なす」のである。さらに、その解釈プロセスの可能性および効果をみるという点で、さらなるメタ表象としてのことばの可変性や面白さを扱う、謎解きのプロセスである。ことば学は、メタ語用論的意識により解釈を立体的に試みる「立体読み」のアプローチといえよう。

３．而して、ことば学

このように、ことば学はメタ語用論的意識によりことばから心を立体的に読むアプローチであり、語用論的転回からさらに解釈学的転回（hermeneutic turn）あるいはコミュニケーション的転回の流れの中にあるといえよう。ことば学は、不十分でありながらもことばが伝える多様な心とその効果を解明しようとするものであり、いわば生きたことばの面白さまで射程に入れている。送り手の「見せる」ことばを手がかかりに、そのことばに含まれた心を、受け手が自分のことばとしてメタ表象を「見なす」のである。

ことば学では解釈プロセスの可能性および効果をみるという点で、さらなるメタ表象としてのことばの可変性や面白さにまで踏み込む、謎解きのプロセスである。そしてこれこそ、情報のあふれる現代で求められるリテラシー、すなわちメタ語用論的意識からことばと心を探求する立体読みで培われることば力に通底していくものといえよう。今後もことばやことば遣いの面白さへの気づきをもたらす、ことば学における読みの至幸を指向して恣行していきたいものである。

参考文献

Carston, Robyn (1998) 'Informativeness, Relevance and Default Pragmatic Inference,' in Carston, R. and S. Uchida (eds.) *Relevance Theory: Applications and Implications*,

pp.179-236, John Benjamins, Amsterdam.

Carston, Robyn (2002) *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication,* Blackwell, Oxford.

Chapman, Siobhan and Billy Clark (eds.) (2014) *Pragmatic Literary Stylistics,* Palgrave Macmillan, London.

Culpeper, Jonathan and Michael Haugh (2014), *Pragmatics and the English Langua*ge, Palgrave Macmillan, London.

Grice, H. Paul (1967/1975) 'Logic and Conversation,' reprinted in Cole, P. and J. L. Morgan (eds.), *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*, pp.41-58, Academic Press, New York.

市川伸一（1977)『考えることの科学―推論の認知科学への招待』中公新書

Lyons, John (1977), *Semantics 2*, Cambridge University, Cambridge.

毛利可信（1980)『英語の語用論』大修館書店

毛利可信（1992)「立体読みのすすめ(1)～(3)」『啓林』4 月～6 月号　啓林館

沖田知子（2017)「ことば学とコミュニケーション」『英語教育徹底リフレッシュ』pp.225-232 開拓社

Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1995[2]) *Relevance: Communication and Cognition*, Blackwell, Oxford.

豊田昌倫（他）（2017)『英語のスタイル―教えるための文体論入門』研究社

内田聖二(2011)『語用論の射程―語から談話・テクストへ』研究社

内田聖二(2013)『ことばを読む、心を読む―認知語用論入門』開拓社

Weber, Jean Jacques (1996) *The Stylistics Reader: from Roman Jacobson to the Present,* Arnold, London.

Wilson, Deirdre (2000) 'Metarepresentation in Linguistic Communication,' in D. Sperber (ed.), *Metarepresentations: A Multidisciplinary Perspective*, pp.411-448, Oxford University Press, Oxford.